

まちづくり訪問記

～ 多様な人が多様に使えるダイバーシティ
な施設が、ウォーカブルな街を創る ～



鵜飼屋開発興業合同会社
代表 交田紳二 氏



建築家 近松慶孝 氏

岐阜市の鵜飼屋地区は、長良川越しに金華山を望む景勝地です。また、長良川温泉や長良川鵜飼など観光資源が豊富で、多くの観光客が訪れます。

一方で、観光客の多くは、温泉ホテル内でのみ過ごす等、回遊性に課題がありました。

そんな中、観光客が最近「長良川沿いを散策時、偶然みつけた、&n(アンドン)という施設に立ち寄り、おいしい料理・地酒や地元市民との交流を楽しめた」等、回遊して地域の魅力を発見した喜びのクチコミを投稿しています。このようなクチコミを見て「&nを目的に、長良川の散策も楽しんできた」等、訪問の目的が多様化していると分かる投稿も見られます。

以上の話は「ウォーカブルなまちづくり」の示唆に富んでいそうです。この目的意識をもって、&nを訪問することにしました。

&nは、十六銀行と民都機構が共同で設立した「じゅうろく・岐阜市まちづくりファンド」が投資した施設です。2018年に閉鎖した木材倉庫をリノベーション(以下、リノベ)して、3つの飲食店を核に様々な店舗等として、2019年5月に再生して開業したものです。地元に住む13人のクリエイターが立ち上げと運営に関与しています。クリエイターは、多様な顔・仕事を持つ人が多い。&nは13人のクリエイターが集結したことで「多様な人が多様に使えるダイバーシティ」な魅力ある施設になったようです。

13人のクリエイターのうち、次のお二人にお話を伺いました。

近松慶孝さん 建築家、古民家ホテル「鵜飼楽屋」オーナー、まちづくり団体「長良会」メンバー
交田紳二さん 陶芸家、鵜飼屋開発興業合同会社の代表、長良会メンバー



長良会は2008年9月に設立後、鵜飼屋地区で様々なまちづくり活動を行っています。

代表的な活動に、まち歩きイベントの定期的な開催があります。

長良会メンバーにとって「鵜飼屋地区ほど、まち歩きが心地よい空間は無い」という自負と地元愛があるから、まち歩きイベント参加者からも「楽しかった」と好評だから、まち歩きイベントが10年強も続いているのでしょう。



こうして、鵜飼屋地区のまち歩きイベント等は地域の内外で評価を高めていきます。この評価は、鵜飼屋地区を、よりウォークアブルなまちにすることを目指す&nの開業に繋がります。

&nを開業する経緯は、近松氏が2018年5月に開業する古民家ホテル「鵜飼楽屋」をリノベしている時、木材倉庫のオーナーが近松氏に「木材倉庫を閉鎖するが、鵜飼楽屋のように、リノベして、長良会による鵜飼屋地区のまちづくりに役立ててほしい」と相談したことに始まります。

一方、長良会も、まちづくりの拠点を創りたいというニーズがありました。そして、木材倉庫と鵜飼楽屋の距離が、約10mと近く、両者を連携して運営することで、もっと魅力あるまちづくりができる、と考えます。

こうして、長良会メンバーのうち13人のクリエイターによる「&nプロジェクト」が始まります。

長良会にとって、&nも他の活動と同様に「プロジェクト」と位置づけています。なぜなら、プロジェクト毎に、メンバーを募る(全員強制ではない)柔軟な働き方が、事業が成功しやすい要因だからです。

柔軟な働き方は、&nの「多様な人が多様に使えるダイバーシティな施設」づくりにも役立っています。

&nは、1階の入口部分が共有スペースで、コンサートや朝市など多様なイベントを開催し、多様な人が集まり、賑わいます。1階の壁面はガラス張りなので、外から施設内の賑わう様子がよく分かり、長良川沿いを散策する者を誘います。

店舗は、3つの飲食店を核に、川魚直売店、インテリアショップ、フラワーショップ、アトリエ等があります。3つの飲食店(居酒屋、カフェバー、イタリアン)は特に、客層も働き方も多様です。



居酒屋「うかいや食堂」は、岐阜県内の地酒を集め、安く飲める店として、おじさん客層に人気です。

交田氏は、よく顧客として立ち寄って、観光客と交流したり、店主が忙しいと接客も行っています。その中で、顧客から「酒を飲んだ後、締めラーメンが欲しいな」という話を聞きます。交田氏も、かねてから5年前に閉店した地元の人気ラーメン店の名物「ベトコンラーメン」を、&nで復活させて目玉商品にできれば、と考えていました。うかいや食堂で商品化すると、マスコミやクチコミで話題となり、ラーメン目当ての客層も来店するようになりました。



カフェバー「bar KAYAK」は、オーナーの近松氏が自ら週3日、バーテンダーとして店頭に立ち、接客を楽しんでいます。建築家の近松氏は、古民家ホテル「鵜飼楽屋」オーナーとしても働き、バーテンダーとしても働き、傍から見ると、多忙を極めてるように見えます。

しかし、近松氏は「鵜飼楽屋をリノベしている時に、&nを立ち上げる相談が舞い込んだように、ある仕事が違う仕事を創造する」と言い、柔軟な働き方を楽しんでいるようです。

イタリアンレストラン「ラ ルカンダ」は、マスコミでも紹介される話題の店で、感度が高い女性客で賑わっています。人気の秘密は、経営者のラットウアーダさん夫妻が、それぞれシェフ、パティシエとしてスキルが高いことにありそうです。

夫のルカさんは出身地のイタリア、パリ、ロンドン等の有名店で腕を振るった人気シェフ。

妻の知世さんは地元出身で「ナガラガワフレーバー」で8年ほど洋菓子作りに従事したパティシエ。

夫婦二人で個性的な店を開業すべく、場所を探している時、&nへの出店を長良会メンバーに打診されています。



このように、&nは長良会メンバーのネットワークを活用して、個性的な出店者を選びます。そして、その出店者は、物を売るだけでなく、顧客との接客や交流を大切にしています。

例えば、インテリアショップ「ノマドライフ」は、単に家具を売る店ではなく、家具選びの相談に乗ってくれたり、顧客が愛着ある家具を修理してくれます。また、近松氏も交田氏も接客を通して、まち歩きを楽しむポイント等を観光客へ伝える一方、観光客が岐阜観光に求めるニーズを聞きだしています。

こうした双方向な接客と交流が「多様な人が多様に使えるダイバーシティな施設」づくりに繋がるのでしょうか。

双方向なコミュニケーションは大きな効果を生みます。まず、施設を顧客ニーズに応えるようにアップデートできます。ベトコンラーメンの商品化はこの好例といえます。そして「地元市民との交流を楽しめた」等の訪問客によるクチコミを誘発して、地域の集客と賑わいを高めることもできます。

訪問客のクチコミが起きやすい要因は、まだあります。鶺鴒屋地区の周辺には、温泉ホテルが集積しています。

ホテルの多くが、&nのチラシを置く等、&nの魅力を観光客に紹介してくれます。こうした連携は、まち歩きイベント等まちづくり活動を10年強も継続する間に培われたのでしょうか。ホテル等が施設内に観光客を囲い込まない連携をするようになった結果、まち歩きを楽しむ人が増えます。

ウォークアブルなまちづくりは、このような連携と、&nのように多様な人が多様に使えるダイバーシティな施設づくりが有効なのでしょう。

まち歩きから始まった長良会による鶺鴒屋地区のまちづくりは、&nという施設づくりを通して、ウォークアブルな魅力を向上させ、地域の集客と賑わいを活性化するフェーズへ進化しています。

&nのような施設が面的に連鎖して、鶺鴒屋地区の賑わいが更に活性化することを期待します。



(当まちづくり訪問記は、2020年2月に現地で行った話をもとに編集者の視点で、まとめたものです。)